

屍の上になつ者たち

クラッカー少尉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然異世界へ放り込まれることとなった日本人の少年、橘旭。

そこには現代のような文明があり、見たことあるようなないような建物が建ち並ぶ。

しかしその世界には魔法があったのだ！

彼がそこで何を為すのか——まだ、誰も想像できない

初投稿です。

遅筆&拙筆&不定期投稿になるでしょうけど読んでいただければ幸いです。

目次

転機 ということ	1
森の中で	7

転機 ということ

「おめでとうございます。君は転生者として選ばれました〜！」

女はパチパチと拍手でも鳴らさんばかりに元気よく言う。

「……は？」

思わずそうとしか返せなかった。

何を言っているんだこいつは、そう懷疑の視線を向けると違和感に気づく。

白い。一面が白い。自分とその女だけが空間が切り取られたかのように色づいていて他は真っ白だ。

ここはどこだろうか、そう疑問に思う。

「まあ、さすがに気づくよね」

「……………ここは……………どこだ？」

「この世のどこでも無い場所。そう言えば君は理解できるかな？」

「……………そうか」

目の前の衝撃に消す言葉が見つからない。

しかし、さつき転生者とか言ったな。

「お前がここに呼んだのか？」

「そうだよ」

女はにっこりと微笑む。

「何が目的で呼んだ？」

「行くんだよ」

「どこに？」

「……………じゃないどこか。私たちの本当の居場所に……………」

「……………」

帰る方法があるなら帰ってやろうか——そう思案するほど気持ちが悪くなったような気がする。

「さて、おふざけはここまでにして真面目な話をしましょうか」

自覚はあつたのな。

そして真面目な表情で語り出す。

「橘旭君！君には転生してもらいます！」

「どっこい」

「ここじゃ無ないどこか。私たちの——」

「そのネタはもういい。真面目な話はどこへ行つた」

「ごめんごめん、つい」

再度真面目な表情をつくり語り出す。

「でも、ここじゃないどこか、あなたの知らない場所であるということは確かよ」
「そうか」

最初から真面目にやれと思いつつ相槌を返す。

「思ったより冷静なのね」

「今ここで俺に何ができるか、お前が何をできるかがわからないからな。取り乱しても仕方がないだろう」

「……そう。まあ、先入観を持って行ってほしくないから場所については何も言わないわ」

行くのは決定事項なのか。

「そうか。なら送る目的は」

「目的 ねえ。そうね、あなたならその目的——その答えにたどり着くでしょう」

「己が目で見よ、そう言いたいのか？」

「そうね……そういうことにしときなさい」

前情報なしで送り込まれるのか。

「餞別とか、そういう何かは無いのか？」

「あなたには何も必要ないでしょう」

前情報どころか手ぶらかよ。

「そろそろ送ろうと思うけど何かある？」

「そうだな……お前は誰だ？」

そう聞くと女はにっこりと微笑み

「あなたなら、私を知っているでしょう」

答えにならない答えを述べ目を閉じる。

「——に平穩がありますように」

その言葉とともに真っ白だった視界が暗転し意識が遠のくような感覚を覚えた。

森の中で

意識が戻るような感覚がすると、視界には一面の木々が映った。

ここはどこであろうか、と益体のないことを考えても仕方ないので辺りを観察するこ
とにした。

目の前の木々は照葉樹林だろうか。

木漏れ日を浴びている葉は光沢していてどことなく分厚い。

気温は自分が木陰にいるため暖かいというには少し物足りなく、日向に出たらさぞ良
い陽気なのだろうなと思うほどの暖かさだ。

また、湿度も体感低くないことを感じ取れたため、日本くらいの緯度や気候であろう
かと推察する。

いや、実際には違うのだろうか。

彼女は俺の知らない場所と言った。

もしそれが本当だとしたら、自分が状況から仮説した現状は当てにならない。
思考の渦に入り込みそうになったので気分転換に周囲を歩いてみる。

土はほどよく湿っていて木々の生長には良さそうだ。

しばらく考えながら歩いていると、少し離れたところから何やら足音とともに声が聞こえてくる。

「確かこの辺にいるってな話だったんだがなあ。見つかったかハルト！」

そう中年の男は青年に話しかける。

「そう簡単にはわかりませんって。こんなところじゃ何も使えないんですから」

「じゃなきゃ俺たちが探す必要もねえかつと」

中年の男は急に立ち止まる。

「どうしたんですか？」

怪訝そうに青年——ハルトが尋ねる。

「足跡だ。どうやらお目当てさんはこの辺にいるそうだ」

中年は自分の足下より少し離れた地面を凝視しそう語った。

その言葉を聞いた途端、ハルトの顔が引き締まる。

「そうですか。何か無礼があつてはいけませんし一度お声掛けしましょう」

「お声掛けつてもなあ……何て言えばいいんだ？」

「そこは……ほら……転生者の方いらつしやいますかー、とか我らが呼びし偉大なる主よ我が眼前に現れたまえ……とか？」

「お前、それ本気で言えるのか？」

「前者はともかく後者は無理です」

「だろうな」

ハルトはニヤリと笑い一拍おく。

「では一度お声掛けしましょう。せーのでいきますよ」

「ちよつ、ちよつと待て！」

「せーの——」

「転生者の方いらつしやいますかー!」

中年の男の声が虚しく響く。

「お前……」

「いや、いくら人っ子一人いない状況とはいえ、大声なんてとてもじゃないけど出せませんよ」

「クソ……このボンボンめ!」

一連の漫才?を聞いていた旭はどう行動をとろうかと思案した。

彼らは転生者を探しているようだ。

自分のことでいいのだろうか?

現状を反芻した後、旭は彼らの前に姿を現した。

「その転生者というのは私でいいのかね?」

「……あなたは？」

急に現れた旭に困惑しつつも、すぐにハルトは冷静さをとりもどす。

「いえ、失礼しました。私はアルフレート・フォン・ハルトマンです。そして——」
「俺……じゃなくて、拙者はデミストロ・アナリヒオと申す者です！」

二人が名乗りを終える。

前者の名乗りは立派なものだったが後者は辿々しきがある。

次は自分が名乗ることを求められるだろうと考えた旭は口を開く。

「私は橘旭だ」

「タチ……バナ……」

何か思うところがあつたのだろうか二人の表情が曇つた。

だがそれは一瞬のことですぐに平静が戻る。

「ではタチバナ様、我々が帝都までお送りいたしますのでご同行ください」

「了解した」

彼ら二人の先導の途中、ギャップ——一帯の木々が倒れていて陽光が十分に差し込む場所——で二人が立ち止まる。

「タチバナ様。これより飛んで帝都へ向かいます」

「飛べるのか？」

「はい。我々は飛べます」

「そうか背中に乗ればいいのか？」

ハルトは旭が冷静に返したことに若干驚きつつも背中に旭を背負い――

「それでは上昇します」

その言葉の後に猛スピードで上空へ上がる。

すると彼の言う帝都なのだろうか、眼下には大きな建物が並ぶ都市を確認できる。

「あれが我らがライヒの帝都コクトーハイムです」

黒糖の家？何だか甘そうだな。

「色々聞きたいことはあるでしょうが、諸々の説明は帝都に到着し次第させていただきます」

「了解した」

そうして三人は帝都へ向かうのであった。